

精選国語総合

【改訂版】

指導資料 現代文教材	28
指導資料 古典教材	40
付属DVD-ROM収録教材	46

小説一 羅生門

◆芥川龍之介

教材のねらい

●学習目標

- ・物語の背景となっている時代状況・社会状況について、本文の記述をもとに確認する。
- ・羅生門の下で雨やみをする下人が置かれた状態とその心情について理解する。
- ・羅生門の楼へ上って以降の下人の心理の推移について把握する。
- ・死人の髪の毛を抜く老婆が置かれた状態と下人に遭遇して以降の心情について理解する。
- ・物語の描写方法や表現効果について考える。

●学習指導のポイント

高等学校の国語教科書の定番教材である芥川龍之介の『羅生門』については、これまで教科書の指導資料・研究論文・授業実践報告という形で、あるいは、担当する教員が培った独自の解釈という形で、教室という現場に向けてさまざまな〈読み〉が提起されてきたものと思われる。今回、『羅生門』を採録するに当たっては、特に次の点に留意して、教科書の脚注や「学習の手引き」を編成し、指導資料の「語句・文脈の解説」や「研究・発展」の項にそれを反映させた。

①「平安朝の下人」という不安定な存在について、飢え死にしようとする直前の状況にもかかわらず、太刀だけは手放そうとしなかったという点に注目して、考察を試みる。また、その「下人」がどのよう

な経緯を経て、「盗人」になっていったのかを解明する。②物語の時代性・社会性などにも配慮しつつ、これまで「下人」の視点からのみとらえられてきた事象についても、例えば、被害者としての「老婆」の立場になってとらえ直す作業をしていく。③物語の〈語り手〉を、近代のある時点において、ある「旧記」に問題意識を触発され、それを参照して、『羅生門』という物語を構成／再構成した存在と位置づける。その上で、素材としての『今昔物語集』や『方丈記』について、検討を加えていく。

「永年、使われていた主人」から解雇されて路頭に迷う状態、通常ならば〈交換〉されなかったようなもの（仏像や仏具を打ち砕いた薪・死人の頭髪を素材にしたかつら・蛇を原材料とした「干し魚」）が商品化されてしまうような社会、自分だけが生き残っていくために、〈弱者〉たる「下人」が〈弱者〉たる「老婆」を否定的に差別し、暴力的に抑圧してしまうような行為、これらは、物語の中の「ひと」とおなじくこの閉ざされたかのような物語からも、我々の〈いま〉・〈ここ〉の問題が浮上してくる。〈他者〉への想像力ということに留意しつつ、〈語り手〉の説明（心理・情景描写）や登場人物の発言・行為について考察する。

◎学習の目標を、具体的に箇条書きでまとめました。

◎学習目標を達成するための具体的な手だてや注意するポイントを示しました。

◎時間・目標・学習内容と指導内容・指導上の留意点を、指導の実際に即して表組みで示しました。

学習指導の展開と評価

●学習指導案例（配当時間六時間の場合）

時間	目標	学習活動と指導内容	指導上の留意点
第1時限	① 本教材についての導入を行う ② 全文を通読して物語の概要を理解する	導入 1 これまでに読んだことのある芥川龍之介の作品について確認する。 1 本文を音読する。 2 音読・黙読を通じて、物語の内容を理解する。 3 初発の感想を話し合う。 4 難解な語句・注目した表現などをチェックする。	1 小学校・中学校時代に読んだ作品があれば、作品名や簡単な感想を発表させる。 1 適宜区切って、指名により音読させる。 2 物語の展開について、その概要を確認させる。 3 印象に残った場面・描写について、自由に感想を述べさせる。 4 わからない語句は辞書で意味を調べておくように指示する。
第2時限	① 物語の背景となっている時代状況・社会状況について本文の記述をもとに確認する	展開1 1 物語の時代・季節・場所・登場人物などについて確認する。 2 当時の社会状況について理解する。（学習の手引き一） 3 羅生門がどのような状態であったか把握する。	1 平安時代（末期）・秋・京都の羅生門・下人という存在などについて確認させる。 2 相次ぐ災いによって荒廃した社会であったことを理解させる。 3 荒れ果てて、死体の捨て場所と化していたことを把握させる。

◎「指導上の留意点」は、「学習活動と指導内容」の内容へ「致するべき」の同一番号で示しました。

◎筆者(作者)の肩書き・業績・作風・著作などについて解説しました。適宜略年譜も掲載しました。

教材の研究

●筆者

芥川龍之介(あくたがわりゅうのすけ)
小説家。一八九二(明治二五)年、東京市京橋区(現、東京都中央区)生まれ。第一高等学校第一部乙類(文科)、東京帝国大学英吉利文学科を卒業。大学在学中に久米正雄・菊池寛らと「新思潮」(第三次、第四次)を創刊、翻訳・小説・戯曲などを発表。一九二六(大正五)年、「新思潮」(第四次・創刊号)に発表した小説「鼻」が夏目漱石の激賞を受け、文壇に登場する機縁となる。初期の作品は(昔)を舞台にした小説が多く、多様なスタイルの短編小説を試み、緊密な文体と知的な構成による作風とによって、人気作家となる。のちに作風を転じて、自己自身に材を求めた作品が書かれるようになるが、健康状態が悪化し、一九二七(昭和二)年に自殺。代表作には、「戯作三昧」(一九一七年)、「地獄変」(一九一八年)、「藪の中」(一九二二年)、「河童」(藪車) (一九二七年) などがある。

●略年譜

Table with 2 columns: Year (e.g., 一八九二, 明治二五) and Event (e.g., 三月一日、東京市京橋区入船町(現中央区明石町)に、新原敏三、ふくの長男として生まれる。この年の十月ごろ、母・ふくが発狂したため、龍之介は母の実家である芥川家(本所区小泉町、現墨田区両国)で養育されることになる。八月、芥川家に養子として入籍し、芥川家の養嫡子となる。

Table with 2 columns: Year (e.g., 一九一〇, 明治四三) and Event (e.g., 三月、東京府立第三中学校を卒業。八月、第一高等学校文科に無試験で合格し、九月に一高に入学する。同級には菊池寛・成瀬正一・井川(恒藤)恭・松岡謙・久米正雄・倉田百三・藤森成吉・山本有三・土屋文明らが出席する。七月、一高を卒業、九月、東京帝国大学文科(英文科)に入学する。二月、菊池・成瀬・松岡・久米らと第三次「新思潮」を創刊する。早春、吉田弥生との結婚を義父母と伯母に反対され、結婚を断念する。十一月、「羅生門」を「帝国文学」に発表する。この月、久米とともに夏目漱石を漱石山房に訪ね、以後、木曜会に出席する。二月、菊池・成瀬・松岡・久米らとともに第四次「新思潮」を創刊する。七月、東京帝国大学(英文科)を卒業、卒業論文は「ウイリアム・モリス研究」であった。十二月、海軍機関学校教授嘱託に就任する。*十二月九日、夏目漱石死去。

Table with 2 columns: Year (e.g., 一九一七, 大正六) and Event (e.g., 五月、第一創作集『羅生門』を阿蘭陀書房より刊行する。二月、塚本文子と田端の自笑軒において結婚式をあげる。七月、春陽堂より『新興文藝叢書第八編』として創作集『鼻』を刊行する。二月、大阪毎日新聞社より辞令を受け取る。報酬月額百三十円、別に原稿料という条件であった。三月、海軍機関学校を退職する。四月、長男誕生、菊池寛の「寛」より「比呂志」と命名する。

Table with 2 columns: Year (e.g., 一九二七, 昭和二) and Event (e.g., 十一月まで)。九月一日、関東大震災に遭遇する。七月下旬から八月にかけて、軽井沢に滞在する。七月、三男・也寸志、誕生する。不眠症・胃腸の不調・神経性狭心症などの症状に苦しみ、一月から二月にかけて静養のために湯河原に滞在する。その後、病状は好転せず、多種の薬物を服用するようになる。*十二月二十五日、大正天皇崩御。一月、義兄の家から出火、義兄に放火の疑いがかかり、義兄が鉄道自殺をする。四月、帝国ホテルにおいて心中を計画するが、未遂に終わる。同月、菊池寛あての遺書を書く。五月、帝国ホテルで心中をはかるが、手当てによって一命をとりとめる。七月二十四日、致死量のヴェロナール、ジャールなどを飲み、自殺。

◎教科書採録本文の出典を示しました。書名・発行年・出版社に加え、必要に応じて小中学校の教科書での扱いについて解説しました。

小説一 羅生門 86

●出典

『芥川龍之介全集第一巻』(一九七七年・岩波書店)による。教科書本文はその全文で、省略箇所はない。初出は「帝国文学」(一九一五年一月号)で、その後、第一創作集『羅生門』(一九一七年・阿蘭陀書房)に収録する際、若干の改訂が施され、『新興文藝叢書第八編 鼻』(一九一八年・春陽堂)に再録するに当たって大幅な改訂が行われ、現行本文に至っている。

▼小中学校教科書での扱い

- 小・中学校の教科書では、次の芥川龍之介作品が教材として取り上げられている。
- 〔小学校〕平成23年度版
- 〔青がえる〕教育出版3下・東京書籍3下
- 〔杜子春〕教育出版6下
- 〔仙人〕三省堂6年
- 〔中学校〕平成18年度版(23年度まで使用)
- 〔トロッコ〕三省堂1年
- 〔鼻〕東京書籍3年
- 〔中学校〕平成24年度版
- 〔トロッコ〕三省堂1年・教育出版1年・東京書籍1年
- 〔少年海〕学校図書3年
- 〔蜘蛛の糸〕教育出版1年

●大意

〔二〇〇字〕

羅生門の下で雨やみをしている下人は、飢え死にをしないためには盗人になるしかないと思うものの、勇気が出ずにいた。一夜を明かすために向かった羅生門の上の楼で、死人の髪を抜いている老婆の姿を目撃する。下人が老婆を取り押さえて問い質すと、老婆は生きていくためにしかたなくしたことだと弁明する。老婆の発言を受けて勇気が生まれてきた下人は、老婆の着物を剥ぎ取って、夜の闇へと消えていく。(二八九字)

〔一〇〇字〕

飢え死にをしないために盗人になるという決断ができずにいた下人は、羅生門の楼内で老婆に遭遇する。生きるためには悪行もやむを得ないという発言を聞いて勇気が生じ、老婆の着物を奪い、夜の闇へと消えていく。(一〇〇字)

●「主題」をめぐる考察

当該作品の作者が、ある「中心となる思想内容」を構想し、それを作品世界において具現化させようとするのは至極当然の営みである。その「中心となる思想内容」を作者自ら「主題」と称することは一向に差し支えない。よって、ある作品において「主題」と名指すものがあるとするならば、そうした作者自身が明定したもの以外には本来的にありえない。例えば、この「羅生門」という作品に対して、作者である芥川龍之介が「大学時代ノート(メモ、カット)」(『芥川龍之介資料集』一九九三年・山梨県立文学館)の「Defence for "Rashomon"」という覚書において、「[moral]・[moral of philistine]」を扱っ

◎教材文全体を意味上の段落に分けて表組みで示し、段落ごとに大意(要旨)をまとめ、小見出しをつけました。

87 教科書 [p.18~p.30]

●全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め〜22・12「……の段へ踏みかけた。」	〈悪〉の道に足を踏み出せない下人 ある日の暮れ方、下人が羅生門の下で、自分の身の上や身の振り方について、思い悩んでいる。
第二段	22・13「それから、……」〜25・9「……いるのである。」	〈悪〉の行為を憎悪する下人 羅生門の上に登ろうとした下人は、楼の上にいる老婆に気づき、その老婆の行為に激しい憎悪を抱く。
第三段	25・10「そこで、……」〜28・5「……ことを言った。」	〈悪〉の存在を懲らしめる下人 下人は老婆の前に飛び出すと、老婆をねじ倒して、門の上で何をしていたのかを聞き出す。
第四段	28・6「下人は、太刀……」〜終わり	〈悪〉の道に足を踏み入れた下人 下人は老婆の話聞き終えると、老婆の着物を剥ぎ取り、蹴倒して、夜の闇へと消えていく。

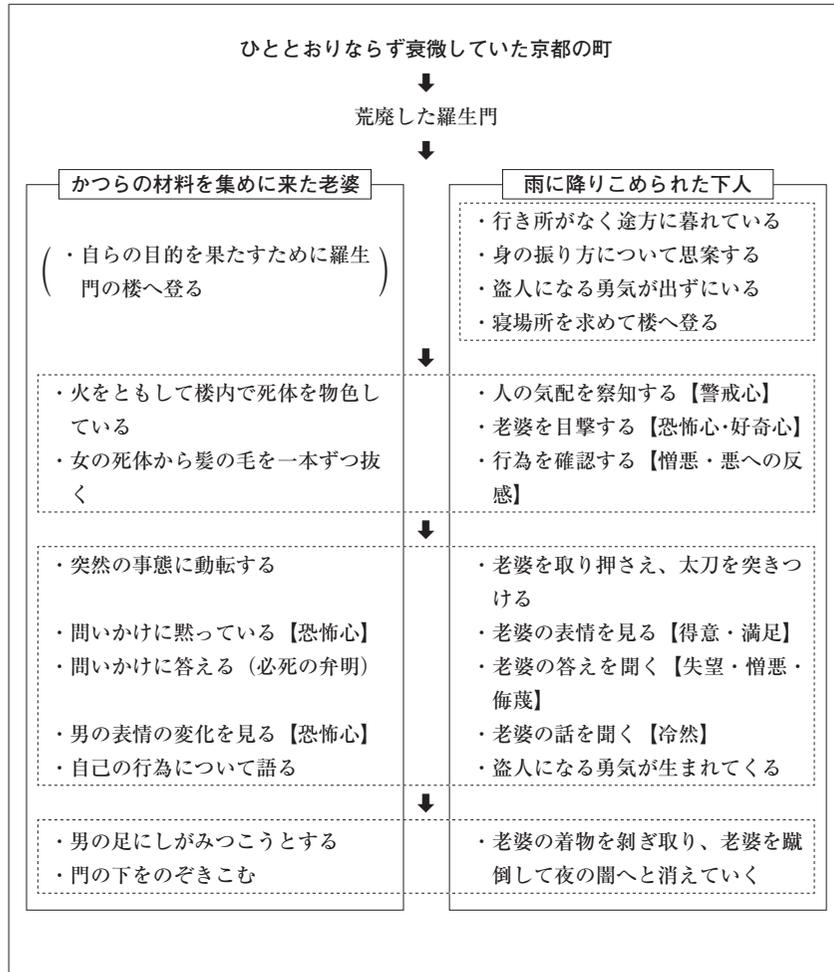
たかったと述べているが、確かに、その「moral」(道徳)もしくは「moral of philistine」(俗人の道徳)という問題は、現行の「羅生門」における「下人」のものの方・考え方にも反映しており、それがこの作品の「主題」となるのかも知れない。
むしろ、ある読み手が、作者自身の履歴・業績・発言などを踏まえて、当該作品からその作者の「中心となる思想内容」を抽出し、それを作品の「主題」であると個人的に主張することは自由である。こ

の「羅生門」という作品に対しては、数多くの研究者・批評家が「主題」について言及してきた。本稿においては、〈モノ〉にも等しい不安定な存在で、自己決定をまなしえなかった男が、自分より弱い存在を否定的に差別することで、一つの方向に向けて生きていこうとする気力を獲得するまでのことが「羅生門」では語られていると考えており、それをこの作品の「主題」として提示することも可能である。

◎教材全体を概観できるよう、内容を図式化したものを示しました。

小説一 羅生門 88

●展開図



◎教科書の「語句」欄の語句や重要な概念、固有名詞などについて解説したほか、読解上のポイントになる文についても取り上げました。

小説一 羅生門 90

語句・文脈の解説

18ページ

L1 ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。この冒頭の形式段落において、「羅生門」という物語の基本的枠組みが、「語り手」(後に「作者」と称して物語に介入してくることになる)によって提示される。すなわち、①いつある日の暮れ方、②どこで羅生門の下にて、③誰が一人の下人が、④何を雨やみを待っている、という物語に関する基本となる情報が明らかになる。やがて①については、平安時代の末期の秋という大枠の情報が付加されるとともに、推移していく時間が示され、②については、平安京にあった羅生門という場所にかかわる否定的情報が語られ、さらに、③をめぐっては、老婆という人物が加わることになる。④については、「申の刻下がり」(20・11)に突然に降りだした雨によって、雨宿りをする必要から、やむを得ずしている行為であること、特別な目的があつてこの羅生門にやってきたわけではない、ということに留意する必要がある。

L1 下人とは「身分の低い者」・「卑賤の者」と解され、そうした意味では差別的な語感を有することはあるともいえる。ところで、『日本国語大辞典』(第二版)によれば「平安時代以後の隷属民。荘園の地頭や荘官、名主や地主などに隷属して、家事、農業、軍事など主家の雑役につかわれ、財産として土地といっしょに、あるいは別々に売買質入や譲渡の対象となった。」とある。また、『日本民衆の歴史』土一揆と内乱(一九七五年・三省堂)によれば「平安時代に新しく登場してきた下人・従者・所従という身分の勤労大衆は、主人持ちであり、主人に人格的に隷属しているという点で百姓身分の農民とはちがっていたが、その実態をみると、家内奴隸的な僕婢労働に従事する者と、住居・経営を持って外居自立している隷属農民とに大別できる存在であった。」という。これをふまえるならば「平安朝の下人」(20・11)とは、当代において、いわば(モノ)として、「商品」として取り扱われるような、きわめて不安定な存在であったといえよう。《語り手》は、物語の冒頭において、単に《ある男》ではなく「一人の下人」と名指すことで、その人物の社会的立場を当てると同時に、その人物の社会的立場について提示しているともいえる。なお、こ

脚問・発問

18ページ

脚問 「ある日」(1行)とあるが、いつころの時代のことか。

答 平安時代。

脚問 「暮れ方」(1行)とは、どのような時間帯をいうのか。

答 夕闇が空に立ちこめ、辺りが暗くなる直前の時間帯。

脚問 「二人の下人」(1行)とあるが、この男はどのような外見・身なりをしているか。本文中の表現を用いて答えよ。

答 「短いひげの中に、赤くうみを持ったにきび」(22・15)が「右の頬」(22・15)にあるという外見上の特徴があり、「山吹の汗疹に重ねた、紺の襖」(22・7)という着衣で、足には「わら草履」(22・12)を履いて、「聖柄の太刀」(22・11)を腰に下げている。

◎授業展開時に有効な発問と解答例を示し、必要に応じて解説を加えました。

◎各教材末にある「学習の手引き」に対する解答例と詳しい解説を示しました。

学習の手引き・言葉と表現・漢字

▼学習の手引き▲

一☆この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写に注目し、そこに描かれている当時の社会状況についてまとめてみよう。

【解答例】

京都では、この二、三年の間に、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こったため、洛中のさびれ方はひととおりではない。仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がつかったり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っているような始末で、物資が不足し、経済的にも疲弊し、人々の心も荒廃していた。その結果、羅生門も荒れ果ててしまい、狐狸や盗人が棲むようになり、ついには引き取り手のない死人を捨てるための場所となってしまう。人々は気味悪がり、暗くなるや門の近所へは足踏みをしないうようになっていた。そうした荒廃した社会状況の中に下人や老婆は身を置いている。

【解説】

平安時代末期（一一八〇年ころ）の京都の町の荒廃について、「語り手」は、福原遷都や戦乱（源平の争い）などの史実を排除して（人災については言及することなく、不可抗力的な「地震とか辻風とか火事とか飢饉」（18・6）という天災が立て続けに起きたことを要因としてあげている。まさに「どうにもならない」という状況を設定したのである。また、「洛中のさびれ方はひととおりではない」（18・7）例と

して鴨長明の「方丈記」の記述を借用して、「仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がつかたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売」（18・8）ると描写する。ただし、借用するにあたっては、原文にある古寺に行って仏像を盗むという部分を削除している。その意図するところは、仏像・仏具などの信仰の対象が単なるモノ化されて、もともとそれが何であつたかわかっても躊躇することなく燃料として売買する者、それを傍観する者の存在を浮上させ、京の町に住む一般の人々の心の荒廃に焦点を当てたためである。平安京における権威や秩序のひとつの象徴でもある羅生門が損壊したままになっていくのも、その一例なのである。結果、荒れ果てた羅生門に対して「妖怪変化や忌まわしい者の存在する場所」という情報が洛中の人々に伝わり、漠然とした恐怖心から「足踏みをしたくないことになってしまった」（19・5）状況が出来た。その上、洛中の人々も浅ましい現場を目にしたことはあろう不吉なものも連想させる「からす」の存在もそうした状況に拍車をかけたのである。要するに「作者」は、「主人」が雑役に使っていたこの下人のような取るに足らない存在までも抱えておくことができない（交換できない）ほどに疲弊した状況、神聖なるもの・醜穢なるもの・食材として認知されていないものなど、通常においては貨幣と交換されないようなものが商品化されてしまうという荒廃した社会状況を設定しているのである。

第一段の京都の町や羅生門に関わる記述内容に注意してまとめると、前段階の作業として箇条書きにして整理するとまとめやすくなるだろう。

盗人恠と思て連司より臨ければ、若き女の死て臥たる有り、其の枕上に火を燃して、年極く老たる嬬の白髪白きが、其の死人の枕上に居て、死人の髪をかなぐり抜き取る也けり、盗人此れを見るに心も不_レ得ねば、此れは若し鬼にや有らむと思て、怖れれども若し死人にてもぞ有る、恐して試むと思て、和ら戸を開て刀を抜て、己はと云て走寄ければ、嬬手迷ひをして手を摺て迷へば、盗人此は何ぞの嬬の此はし居たるぞと問ければ、嬬「己が主にて御ましつる人の、失給へるを繰ふ人の無ければ、此て置奉たる也、其の御髪に長に餘て長ければ、其を抜取て髪にせむとて抜く也、助け給へ」と云ければ、盗人死人の著たる衣と嬬の著たる衣と抜取てある髪とを奪取て、下走て逃て去にけり、然て其の上の層には死人の骸ぞ多かりける、死たる人の葬など否不_レ爲をば此の門の上にぞ置ける、此の事は其の盗人の人に語けるを聞繼て、此く語り傳へたるとや。

太刀帯陣賣魚唄語第卅一

今は昔、三條の院の天皇の春宮にて御ましける時に、太刀帯の陣に常に来て魚賣る女有けり、太刀帯共此れを買ひて食ふに、味ひの美かりければ、此れを役と持成して菜料に好みけり、干たる魚の切々なるにてなむ有ける、而る間八月許に、太刀帯共小鷹狩に北野に出で遊けるに、此の魚賣の女出来たり、太刀帯共女の顔を見知たれば、此奴は野には何態爲るにか有らむと、馳て思寄て見れば、女大きやかなる籬を持ちたり、亦楚一筋を捧て持たり、此の女太刀帯共を見て、恠く逃目を仕ひて、只驥ぎに驥ぐ、太刀帯の從者共寄て、女の持たる籬には何の入たるぞ見むと爲るに、女惜むで不_レ見せぬを、恠かりて引奪て見れば、馳を四寸許に切つ、入

◎教材文や出典、筆者（作者）についての詳しい解説や指導に役立つ資料を掲載しました。

125 教科書 [p.18~p.30]

研究・発展

◎作品解説

「羅生門」という物語と二つの「旧記」

周知のごとく、「羅生門」という物語の基底には『今昔物語集』所収説話や「方丈記」の記述内容が深くかかわっている。（素材源）であるそれらの存在について、「羅生門」の「作者」と称する（語り手）は「旧記」という呼称で名指している。既に、「語句・文脈の解説」の項で紹介したように、時代背景・風物・心情などを説明する際に、数多くの借用がそこにみられる。「羅生門」という物語の基本的構造について改めて確認するならば、近代のある時点において、『今昔物語集』や『方丈記』の記載事項を目にした存在がいて、その記述にある問題意識が触発され、それを参照して「羅生門」という物語を構成・再構成した、という形を取っている。

その主たる（素材源）に『今昔物語集』巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語」同じく巻三十一第三十一話「太刀帯陣賣魚唄語」がある。それぞれの本文は次のとおりである。なお、引用は「語句・文脈の解説」と同様に『今昔物語下巻・古今著聞集』（校註國文叢書第十七冊）（一九一五年・博文館）による。

羅城門登上層見死人盗人語第十八

今は昔、攝津の國邊より盜せむが爲に京に上ける男の、日の未だ暮ざりければ、羅城門の下に立隠れて立てりけるに、朱雀の方に人重り行ければ、人の靜まるまでと思て門の下に待立てりけるに、山城の方より人共の數來たる音のしければ、其れに不_レ見えじと思て、門の上層に和ら搦つき登たりけるに、見れば火籠に燃したり、

◎「読解から表現へ」については、示された用語の詳しい解説に加えて、教科書で設定された課題について、解答例と解説を載せています。

読解から表現へ ⑥推敲 68

学習指導例

課題 次の文を推敲してみよう。

1 私にとって高校生時代に夢中!になったことは、高校時代に、部員が少なくて困ったけど、所属していた吹奏楽部で演奏していたトランペットを吹くということです。

【解答例】

教科書166ページ「推敲のポイント」

- ②会話口調をそのまま地の文に用いない。
- ③疑問符(?)や感嘆符(!)などの符号を避け、できる限り言葉で伝わるように表現する。
- ⑥主語と述語を対応させる。長い文は二文に分けるなど工夫する。

私は高校生時代に吹奏楽部に所属していました。部員が少なくて困ったこともありましたが、それでもトランペットを吹くことに夢中だった三年間でした。

【解説】

この課題文の問題は、主語は一貫して「私」のだが、「夢中!」になった「困った」「吹く」ということと、「一文の中に述語(述部)が三つ入っていることにある。作文の基本は、短文を単文(主語と述語が一つずつある文)で構成することである。解答例は、述語三つを生かす形にしてあるが、もちろん推敲の仕方は無数に存在する。添削する際には、短文であること、単文であることの二点に留意したい。

2 地球温暖化が進んでいる原因は何か? その原因は、私たち人間のせいです。政府がするべきことは、1人1人の意識改革を目指して、メディアと協力して環境問題をもっとアピールするべきだと思う。

【解答例】

教科書166ページ「推敲のポイント」

- ①文体を統一する。敬体(です・ます)と常体(だ・である)の混用を避ける。
- ④縦書きの文章では、原則として漢数字を使用する。
- ⑤修飾語をいくつも重ねたくどい表現や、同じ意味の言葉・語句の重複は避ける。
- ⑥主語と述語を対応させる。長い文は二文に分けるなど工夫する。

地球温暖化が進んでいる原因は私たち人間にある。政府はメディアと協力して、環境問題の深刻さをもっとアピールするべきだ。一人一人の意識改革を目指す必要があるのである。

【解説】

この課題文の問題は、文体の不統一、不適当な表記、言葉の重複、主述のねじれにある。「原因は、せいです。」「するべきことは、すべきだと思う。」などの重複表現に気づかせたい。解答例は、述語を中心にして文を再構成した形にしてあるが、場合によっては、「課題文を三つの文に書き直しなさい。」などの指示が必要だろう。

◎教材によっては「発展課題」を設定し、学習を深めることができますようになっています。

69 教科書[p.166]

発展課題1

次に示すのは、一九八九年に国連総会で採択された「子どもの権利条約」第2条の日本政府による訳文である。これを読んで、表現のうえで気がついた点を話し合ってみよう。

- 1 締約国は、その管轄の下にある児童に対し、児童又はその父母若しくは法定保護者の人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治的意見その他の意見、国民的、種族的若しくは社会的出身、財産、心身障害、出生又は他の地位にかかわらず、いかなる差別もなしにこの条約に定める権利を尊重し、及び確保する。
- 2 締約国は、児童がその父母、法定保護者又は家族の構成員の地位、活動、表明した意見又は信念によるあらゆる形態の差別又は処罰から保護されることを確保するための適切な措置をとる。

【解説】

法律の条文には、独特の用語が登場する。全体的には、理解するのに少し苦労しそうな固く、古風な表現が多く用いられている。先の条文を読むと、まず「締約国」という用語から始まっている。国語辞典を調べてみると、正確な意味がわかりにくい言葉である。さらに、単に「保護者」というのではなく「法定保護者」という用語が用いられているのを見ればわかるとおり、厳密な用語上の規定がなされていることが特徴になっている。「若しくは」や「いかなる」という言葉遣いも、古風に感じられるのではないだろうか。この「子どもの権利条約」の訳文は、その理解において誤解が生じることを防ぐための表現が意識的に用いられているために、このような感じがするのであろう。しかし、本来「子ども」のためにある条約

発展課題2

次に示すのは「子どもの権利条約」第13条の日本政府による訳文である。これを小学生にも理解できるように書き改めてみよう。

- 1 児童は、表現の自由についての権利を有する。この権利には、口頭、手書き若しくは印刷、芸術の形態又は自ら選択する他の方法により、国境とのかかわりなく、あらゆる種類の情報及び考えを求め、受け及び伝える自由を含む。
- 2 1の権利の行使については、一定の制限を課することができる。ただし、その制限は、法律によって定められ、かつ、次の目的のために必要とされるものに限る。
 - (a) 他者の権利又は信用の尊重
 - (b) 国の安全、公の秩序又は公衆の健康若しくは道徳の保護

なのであるから、肝心の「子ども」にとつて、もっと理解しやすく、また親しみのもてるような表現、例えば小学生にも十分理解できるような表現に書き改めてみたらどうなるだろうか。

ただし、単にやさしい言葉に言い換えればよい、というような姿勢では、「小学生にも十分理解できるような表現」には改められない。人に何かを伝えようとするのであれば、伝える中身をしっかりと把握しておかなければならない。

そこでまず、この条文がどのような約束を表現したものであるのか、ということを書き直すと理解しようとする姿勢が大切になる。辞書を引いたり、図書館などで条約の内容について調べたりすることが必要になってくるかもしれない。そうした作業を通して把握できた確かな理解があつてこそ、わかりやすく伝えられる表現が実現できるのである。

◎教材全体を概観できるよう、大意を示すとともに、全体の構成を表組みで示し、それぞれの段落に小見出しを立てました。

段落	ページ・行	大意
第一段	126・4「燕人立太子平」～127・1「得身事之。」	昭王、賢者の招聘を望み、郭隗に相談 新たに即位した燕の昭王は、戦争に関係した国民を労り、自らへりくだって賢者の招聘を目指した。そして郭隗に対し、斉に殺された先君の屈辱に報いるためには、弱小の燕は賢者を招聘するしかなく、それにふさわしい人物を紹介するように言った。
第二段	127・2「隗曰」～ ～終わり	郭隗、自身の登用が賢者の招聘につながることを説く 郭隗は昭王に言った。古のある君主が、千金をかけて一日に千里走る名馬を手に入れるべく側近に頼んだ、すると側近は死んだ馬の骨を五百金で買って帰った。怒る君主に対して側近は、死馬さえ大金で買ってくれれば、生きた馬ならいくらでもなく大金で買ってくれると思うもの、今に馬は来ると言い、ほどなく名馬がやってきたという。だから、まず自分、郭隗を登用すれば、それを聞いて自分より賢い者は遠くからもきっと集まるだろう、と。昭王は郭隗に手厚い待遇をし、これに師事した。すると賢士は争って燕にやってきた。

〔参考〕127ページ6行目「於是」以下を別段落として、全体を三段落構成とすることもできる。

●大意
燕では太子平が推戴されて昭王となり、自らへりくだって賢者を招聘しようとしていた。そして郭隗に対し、斉に殺された先君の屈辱に報いるのにふさわしい人物を紹介するように言った。
郭隗は死馬を大金で買うことで、生きた馬ならどれほど高く買ってくれるかと思わせ、結局名馬三頭を招いたという古の君臣の話をし、まず自分を登用すれば、それを聞いて自分より賢い者は遠くからもきっと集まるだろう、と説く。
昭王が郭隗に手厚い待遇をし、これに師事すると、賢士は争って燕にやってきた。

●全体の構成

◎教材本文の書き下し文を総ルビで掲載し、口語訳と対応させて示しました。(古文教材では品詞分解と口語訳を掲載しています。)

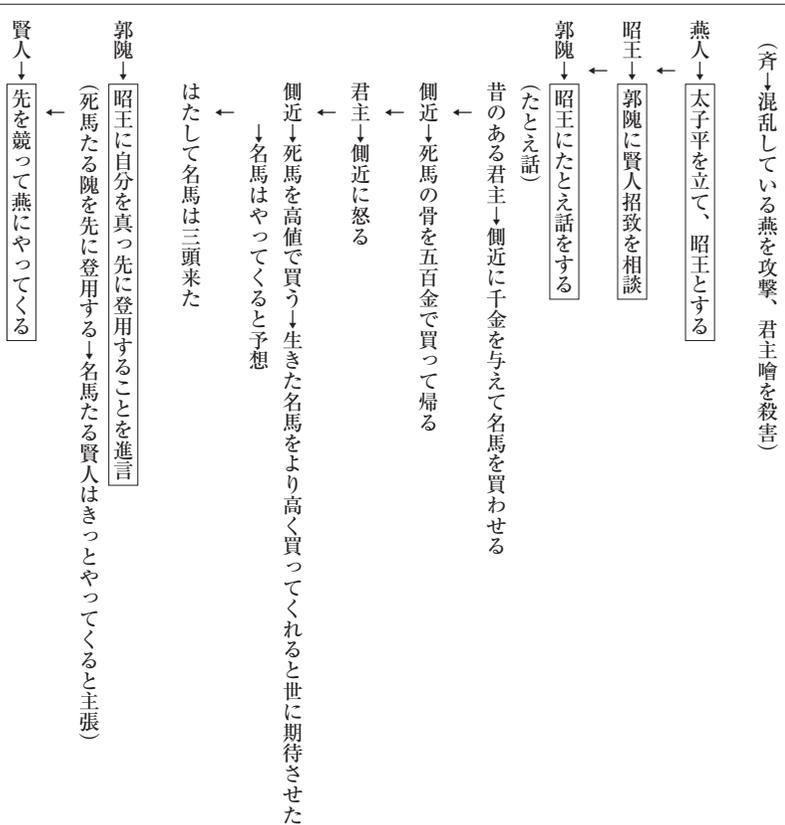
史話 先従隗始 126

●書き下し文・口語訳

【書き下し文】	【口語訳】
<p>燕人太子平を立てて君と為す。是を昭王と為す。死を用ひ生を問ひ、辞を卑くし幣を厚くして、以て賢者を招く。郭隗に問ひて曰はく、「齊は孤の国の乱るに因りて、襲ひて燕を破る。孤極めて燕の小にして以て報ずるに足らざるを知る。誠に賢士を得て与に国を共にし、以て先王の恥を雪がんことは、孤の願ひなり。先生可なる者を視せ。身之に事ふるを得ん。」と。</p> <p>隗曰はく、「古の君に千金を以て涓人をして千里の馬を求めしむる者有り。死馬の骨を五百金に買ひて返る。君怒る。涓人曰はく、『死馬すら且つ之を買ふ。況んや生ける者をや。馬今に至らん。』と。期年ならずして、</p>	<p>燕の人々は太子の平を推し立てて君主とした。これを昭王という。(昭王は)戦死者を弔い、生存者や遺族を慰め、(一方へりくだった言葉を使い、多くの贈り物を用意して、(天下の)賢者を招き寄せようとした。(そこで)郭隗にこう言った、「齊は私の国の混乱に乗じ、襲撃して(わが)燕を打ち破った。私は(この)燕が小国で(齊に)仕返しをするだけの力がないことを認識している。なんとしても賢人を得て(彼らと)国政を一緒にに行い、そうして(齊に殺された)先代(隗)の受けた恥辱をすぐることこそ、私の願いである。(どうか)先生、(この私の思いに)ふさわしい人物を示してほしい。わが身はその人物を師として仕えることとなろう。」と。</p> <p>隗は言った、「昔の君主で、千金(もの大金)を使って側近に一日に千里を走るといふ名馬を買ひ求めさせた人がいました。(すると従者は)死んだ馬の骨を五百金で買い取って帰ってきました。君主は怒りました。(すると)側近はこう言いました、『死んだ馬(の骨)ですら(高値で)買い取ったのです。まして生き</p>

◎教材全体を概観できるよう、内容を図式化したものを示しました。

●展開図



◎教科書の「語句」欄の語句や重要な概念、固有名詞などについて解説したほか、読解上のポイントになる文についても取り上げました。

語句・文脈の解説と脚問・発問

- 126ページ
 - L1 燕 燕は周代の諸侯国の一つで、戦国の七雄の一つでもあった。現在の河北省と遼寧省とにまたがる。
 - L4 燕人 「えんひと」と読む。「燕の人々」の意。国名・地名に続く「人」は「ひと」と読むのが通例。
 - L4 立太子平為君 太子の平を推し立てて君主とした。「太子」は君主の地位の継承者。「為」はこの場合「ある状態を形成する」の意で、「……とした(即位させた)」と訳す。
 - L4 昭王 在位は前三一一年〜前二七九年。喩の子。
 - L4 弔死問生 戦死者を弔い、生存者や遺族を慰める。父喩とは対照的な、人民に心をかける昭王の姿である。一説に「人民に死者があれば弔い、出産があれば祝いにいく」とする。
 - L5 卑辞厚幣 へりくだった言葉を使い、多くの贈り物を用意する。「辞」は言葉遣い、「幣」は賢者への贈り物。
 - L5 郭隗 燕の人。この故事で有名な人物であり、他の事跡は不詳。
 - L5 孤 王侯の謙称。春秋時代、王侯の自
- 127ページ
 - L1 可者 ふさわしい人物。ここでは、ともに国政を執るに足る人物。
 - L7 視 示せ。推挙してほしい。「視」はこの場合「示」の意。
 - L7 先王之恥 先の王、つまり昭王の父、喩が、斉に攻め入られて殺害されたという恥辱。
 - L7 雪 すすぐ。(恥を)除き去る。「雪辱」の「雪」。
 - L6 賢士 「賢者」に同じ。賢人。
 - L6 誠 なんととしても。是非とも。
 - L7 与共国 国政を一緒に行う。「与共」は「一緒に」の意。「与共」は二字続けて「とも」ともニス」とも読む。その場合「国を共にし」となる。
 - L6 報 仕返しをする。「報復」の「報」。ここでは、小国燕が大国斉に報復するということ。
 - L6 賢士 「賢者」に同じ。賢人。
 - L7 与共国 国政を一緒に行う。「与共」は「一緒に」の意。「与共」は二字続けて「とも」ともニス」とも読む。その場合「国を共にし」となる。
 - L6 報 仕返しをする。「報復」の「報」。ここでは、小国燕が大国斉に報復するということ。

脚問・発問

- 126ページ
 - 問 昭王が賢人を招こうとしたのはどういう思いからか。
 - 答 斉に敗北した燕は小国で、このままでは斉に仕返しをすることができないため、賢人を招いてその教えを仰ぎ、ともに国政を行うことで挽回をはかり、先君の雪辱を果たそうという思い。
 - (解説) 燕が斉に敗れ、先君を殺されていること、小国であることなどに留意すること。
 - 問 「先生」(7行)とはここでは誰のことか。
 - 答 郭隗のこと。
 - (解説) 「先生」は有徳の年長者や学問を教える人への尊称。いずれにせよ尊称であり、昭王の郭隗に対するへりくだった姿勢が示されている。
- 127ページ
 - 問 「得身事之」(1行)を、「之」の指している内容を補って口語訳せよ。
 - 答 わが身はその人物を師として仕えることとなろう。
 - (解説) 「得」は、この場合「……することが必要」の意で、「……することとなる」などと訳す。「仕えるべきだ」「仕えたい」と思

◎授業展開時に有効な発問と解答例を示し、必要に応じて解説を加えました。

◎教科書に掲載されている図版や写真についても解説を加えました。

◎内容理解の参考となる興味深いコラムを適宜掲載しました。

L6 宮 邸宅。先秦までは「宮」「室」は住居を意味したが、秦漢以降、「宮」は帝王の宮殿、「室」は一般の住居の意となった。
L7 士争趨燕 (天下の賢人たちは競って燕にやってきた。「争」は「先を争って」。「趨」は「おもむく」と読み、「やってくる」の意。漢語「趨参」の「趨」。

*句法
[A]且[B]。況[C]乎 [A]でさえ[B]である。まして[C]ならなおさら[B]だ。(抑揚)
[A]於[B] [B]よりも[A] (だ)。(比較)
豈[A]哉 どうして[A] (しよう)か、いや[A] (し)ない。(反語)

【コラム】蘇秦の弟も語った「駿馬」のたとえ話

「学習指導のポイント」にも記したが、縦横家蘇秦は、合従策をもつてよく知られている。その蘇秦の弟蘇代も遊説家であり、斉を利するため、策謀によって燕の君主を退位させるなど、まさにこの時代に斉と燕の間で活躍していた。この蘇代も名馬のたとえ話をうっている。

喟が燕の国王であった頃、蘇代は燕のために斉に遊説に行った。齊王に会えなかったたので、王家の入り婿の淳于髡(こ)以下のように自分を売り込んだ。
「ある人が駿馬を市場で売っていたが、三日たっても売れない。そこで伯楽(馬

のよしあしを見抜く人)の所へ行き、『どうか、市場で私の馬の周りを回ってじっと見て、去りぎわに(もの惜しげに)また私の馬を見つめてほしい。そうしたら市に払う一日分の税の額をあなたにやろう』と頼んだ。伯楽が言われた通りにすると、一日で馬の値は十倍に跳ね上がったという。どうか伯楽になつて私を王に薦めてくれれば、お礼はたんまりしますよ。』(『戦国策』による)

戦国期、名馬は諸侯王の間で必需品だったので、このようなたとえ話は多くなされたのである。

句法に留意して口語訳せよ。
[審] まして隗より優れた(千里の名馬のような)人物が、どうして千里(の道のり)が遠い(と)いつて来ない)ことがありましようか(いや、やってきます)。
[解説] 抑揚の「況……哉」、比較の「[A]於[B]」、反語の「豈……哉」に留意して訳す。
[審] 郭隗の策が功を奏し(隗が燕に登用されたことを知った天下の賢人たちが、自分も燕に登用されることを期待し)たから。
[解説] 「争趨」という表現に、郭隗の思惑がみごとに当たり、賢士たちが自己の登用を大いに期待しているさまがよくうかがえる。隗の話は単なる詭弁ではなかったということになる。

・図版解説

●馬踏飛燕(教科書126ページ)

甘肅省で発掘された漢代のブロンズ像。馬が足で燕を踏んでおり、燕より速い駿馬であることを示している。文人政治家郭沫若によって「馬踏飛燕」と命名されたという。甘肅省博物館蔵(シーピー・フォト提供)。

◎採録教材の主題や、関連する章段や作品への言及など、教材への理解を深める内容を掲載しました。

133 教科書[p.126~p.127]

●鑑賞

「戦国の七雄」の中にあつても、他国に比べ燕はさほど強くはなかつた。まして当時、君主の喟が、斉に肩入れした遊説家蘇代の策謀にかかつて王権を宰相に譲るに至り、内政は混乱をきわめ、斉に攻撃されて喟が殺されるといふ、悲惨な敗北を喫していた。この話の冒頭の部分は、代わつて即位した太子平(昭王)が、善政を心がけて起死回生をはかろうとしている様子を簡潔に描いている。郭隗に語りかけるその言葉には、身を低くしつつ、挽回を切望する名君の姿が確かに浮かび上がつてこよう。郭隗の言に納得し、彼を厚くもてなして師事する後段の姿も同様である。「研究・発展 参考資料1」に示すが、燕はこの昭王の代に、魏から名将楽毅を、斉から陰陽家の驩衍を、趙から軍略家劇辛を迎えるなど、王の願ひ通りに賢士を招致することに成功、彼らの活躍によって国を強くし、諸国と同盟して斉を敗北させるに至るのである。

郭隗は千里の馬のたとえ話をうっているが、『戦国策』によれば、先に蘇代が燕のために合従策を斉に説きに行った際、自己を齊王に売り込むために駿馬と伯楽のたとえを用いている(コラム「蘇秦の弟も語った『駿馬』のたとえ話」参照)。名馬のたとえ話は当時よく用いられたのである。

郭隗の、たとえ話をういた弁舌は、自分を「死馬の骨」として卑下することで、自分の登用こそが千里の馬たる賢士を招致する起爆剤となること説くものである。逆説を用いた実に巧みな売り込みでもあつた。しかしこれ以降、燕は賢士の招致に成功し、斉への仕返しをも成し遂げるのであるから、郭隗の言は単なる売り込みのための詭弁ではなかつたということになる。

●参考

教科書掲載部分のあとに、招致された楽毅らの活躍と、昭王亡きあとの顛末が示されているので、以下に引く。

楽毅自魏往。以為二亜卿、任三国政。已而使毅伐齐。入臨淄、齐王出走。毅乘勝、六月之間、下二齐七十余城。惟莒即墨不降。昭王卒、惠王立。惠王為二太子、已不快於毅。田單乃縱二反間曰、「毅与二新王有隙、不敢歸、以伐齐為名。齐人惟恐二他将来、即墨残矣。」惠王果疑毅、乃使二騎劫代将、而召毅。毅奔趙。田單遂得破燕、而復二齐城。

【書き下し文】

楽毅は魏より往く。以て亜卿と為し、国政を任ず。已にして毅をして齐を伐たしむ。臨淄に入り、齐王出で走る。毅勝ちに乘じ、六月の間に、齐の七十余城を下す。惟莒と即墨とのみならず。昭王卒し、惠王立つ。惠王太子たりしとき、已に毅に快からず。田單乃ち反間を縱ちて曰はく、「毅新王と隙有り、敢へて帰らず、齐を伐つを以て名と為す。齐人惟他将の来たりて、即墨の残せられんことを恐る。」と。惠王果たして毅を疑ひ、乃ち騎劫をして代はりて将たらしめ、而して毅を召す。毅趙に奔る。田單遂に燕を破りて、齐の城を復するを得たり。

【口語訳】

楽毅は魏から燕に赴いた。(昭王は彼を)二番家老とし、国政をゆだねた。やがて毅に齐を討伐させた。(毅は齐の都)臨淄に入城した。齐王は(都から)出奔した。毅は勝利に乗じて、六か月の間に、齐の七

付属DVD-ROM ワークシート

◆構成・内容理解シート
教材文の構成や内容を、表や図に整理して理解するためのワークシートです。

◆構成・内容理解シート
教材文の構成や内容を、表や図に整理して理解するためのワークシートです。

5 巻頭	語句学習シート⑤	月	日
4 巻頭の	年組氏名		
3 巻頭			
2 巻頭			
1 巻頭			

◆語句・漢字学習シート
教科書の脚注欄に示した語句や漢字について、意味や文法事項を調べ、確認するワークシートです。

4 いなや	語句学習シート10	月	日
3 抑子	年組氏名		
2 ねんてなり			
1 おろか			

*その他、古文教材の品詞分解を書き込むための「古文品詞分解シート」、漢文教材の書き下し文を抽出した「漢文書き下し文シート」、古典教材の口語訳を抽出した「古典口語訳シート」を収録しています。

付属DVD-ROM 基本テスト

6 水の東西 ①

33 ある人、司射のことを習ふに

短時間で基礎を養う小テストです。現代文では漢字や語句、古文では文法、漢文では句法などについて出題します。

付属DVD-ROM 評価問題集

先従開始

定期考査などに使える問題を、各教材、難易度別に複数収録しています。長文の教材は出題箇所を変えるなど、重要なポイントを網羅します。解答に加え、丁寧な解説も付しています。

付属DVD-ROM

学習課題ノート

付属DVD-ROM

その他の収録データ

三 併置 (二) 水の音 山鹿正和『雑書』P.465 P.51 拾遺

漢字・語句を整理しよ。

一次の「線部の漢字の意味をひらがなで書きなさい」

① 水受けが剛 「ね上がる」

② 全一併列 「に終わる」

③ 時を刻 「む」

④ 庭の樹葉 「が引き立つ」

⑤ 割割 「な竹の響き」

⑥ 朝 「やかな芸術」

⑦ 鹿向を頷 「らす」

⑧ 表情に返 「し、い、い」

⑨ 守備の間隙 「を突かれる」

⑩ 行為の胸図 「を貫す」

⑪ 芸術をかいたヨウ 「する」

⑫ 芸術をかいたヨウ 「する」

⑬ シューのイタタン 「く」

⑭ くぐりとカタム 「く、く」

⑮ オレヨウ 「の良いホール」

⑯ 音を響との音いカタム 「く」

⑰ 水を列 「を上げる」

⑱ 庭を列 「あつく」

⑲ 水を列 「あつく」

⑳ ソウタイ 「な建築」

㉑ オオサカ 「の町」

㉒ 造するカタムヨウ 「く」

㉓ 芸術をかいたヨウ 「する」

三次の語句の意味を答えなさい。

① 愛嬌

② 徒勞

③ 鹿向

④ 感性

⑤ 間隙

⑥ 間隙

⑦ 間隙

⑧ 間隙

⑨ 間隙

⑩ 間隙

⑪ 間隙

⑫ 間隙

⑬ 間隙

⑭ 間隙

⑮ 間隙

⑯ 間隙

⑰ 間隙

⑱ 間隙

⑲ 間隙

⑳ 間隙

㉑ 間隙

㉒ 間隙

㉓ 間隙

㉔ 間隙

㉕ 間隙

㉖ 間隙

㉗ 間隙

㉘ 間隙

朗読CD

一部の教材について、朗読を収録した音声CDです。

◆収録教材例

日本語の響き

〈現代文編〉

羅生門

旅上

サーカス

I was born

崖

〈古典編〉

伊勢物語

漢詩

春曉／筒井筒

春曉／静夜思／江雪／送元二使安西／

黄鶴楼送孟浩然之広陵／涼州詞／春望／

登岳陽楼／香炉峰下、新ト山居、草堂初成、偶題東壁

※その他、学習に役立つさまざまな音声も収録予定です。

別売の『学習課題ノート』の内容を自由に加工できるデータで収録しています。